

2025年度4Q決算説明会 主な質疑応答

(2026年5月13日開催)

<全体>

Q1 : DPE 関連損失として 2025 年度は 184 億円の特別損失を計上しているが、2026 年度はどの程度の特別損失を想定しているのか？

A1 : 各ステークホルダーとの協議次第で想定数値が大きく異なる可能性があるため、明確なことは言えない。DPE は今後の費用負担を最小化すべく、各ステークホルダーとの協議を継続し、休止作業の進捗に応じた人員の適正化を進めている。なお、2026 年度に発生する DPE 関連損失については、2025 年度と同様に、特別利益等で補填する計画。

<電子・先端プロダクツ>

Q2 : 中東情勢によって、シンガポール工場でのアセチレンブラックの原材料調達に制限されている現状において、回復の目途は？また、国内工場から代替出荷できるのか？

A2 : 現時点で調達先の工場の稼働回復の情報は確認できていない。また、シンガポールで製造するアセチレンブラックの主な用途は高圧ケーブル用途であり、大牟田工場からの供給で代替が可能。ただし、生産能力に限りがあり、カバーしきれないマイナス影響を業績予想に織り込んでいる。

Q3 : 軟質系スネクトンの 2026 年度の販売見通しは？

A3 : ユーザーでの次世代グレードの立ち上げが 2026 年度中に予定されている。また、銅張積層板（CCL）の構成材料である低誘電ガラスクロスは、供給が需要に追いついていない現状であるが、2026 年度下期以降から各社の増産により緩和する見込である。そのため、軟質系スネクトンは、2026 年度下期から大きく立ち上がる想定をしている。

Q4 : 2026 年度のスネクトンの売上見通しの中で、軟質系と硬質系の比率は？また、硬質系スネクトンの設備増強の検討状況は？

A4 : 2026 年度のスネクトンは軟質系の売上だけを見込んでいる。硬質系スネクトンの設備増強については、現在ユーザーの認証作業中であり、ユーザーの評価結果を見て最終判断をする。

Q5 : 球状シリカ、球状アルミナの販売動向は？

A5 : 球状シリカ、球状アルミナの販売数量は、AI やデータセンター向けデバイス需要の引き合いが非常に強い状況であり、2025 年度の販売は大きく伸長した。2026 年度は 2025 年度の販売実績からさらに 10～15%程度の拡大を見込んでいる。

<エラストマー・インフラソリューション>

Q6 : クロロプレンゴムの値上げ幅が 25 円/kg と、他社の値上げ幅よりも小さい理由は？

A6 : DPE 暫定停止により青海工場のみでの生産体制で数量上限がある中、製法が異なることを考慮の上、長期的な収益性向上を狙うポートフォリオ戦略を踏まえ、今回の値上げ幅とした。

<ポリマーソリューション>

Q7：中東情勢影響に起因する原材料の調達制限による減産影響として、15億円見込んでいるが、下期も調達不安があるのか？またユーザーへの価格転嫁はどのように考えているか？

A7：現時点で、ユーザーへの供給での影響は発生していない。しかし、中東情勢が不透明なため、保守的に予想値には織り込んだ。なお、今回の予想値には価格転嫁のプラス影響を大きくは織り込んでいないが、樹脂製品を中心に早いスピードで価格転嫁が進んでいる。

以上